

地域の底力 富山市

人の心を動かす
富山県富山市の
コンパクトなまちづくり

機能性の高いコンパクトシティが、市民の暮らしを変えつつある富山市。成果の陰には市民の心の機微にふれる、細やかな思いやりがあふれていた。

富山駅を含めた市街地を1周約28分で走るセントラム（市内電車環状線）は、市民だけではなく観光客にとっても頼りになる交通手段だ。背景を彩るのは、「富山市郷土博物館」として1954年に富山城址公園に建てられた富山城。

取材・文山内史子
写真 野瀬勝一



市庁舎は地上8階建て。最上階にある展望塔は、立山連峰や富山湾などが見える市内随一の絶景ポイント。

高齢者が運転免許証を自主返納した場合、二万円分の公共交通利用券が贈られる制度も功を奏している。

「自主返納者は、増えてきています。免許証の保有者であったという証明書が出て、それがIDとして使えるようになりました。能力がなくてやめたのではなく、自らの意思で返したとなれば逆に誇りになりますから」

ほかにも、花束を買うと電車が無料になるサービスがあるなど、まちの機能を整えるだけでなく、住民の心の機微にふれる施策を組み合わせているのが面白い。

一方で団子となる拠点づくりとしては、串となる沿線への居住推進と中心市街地の活性化が行われてきた。推進ゾーンでの住宅購入

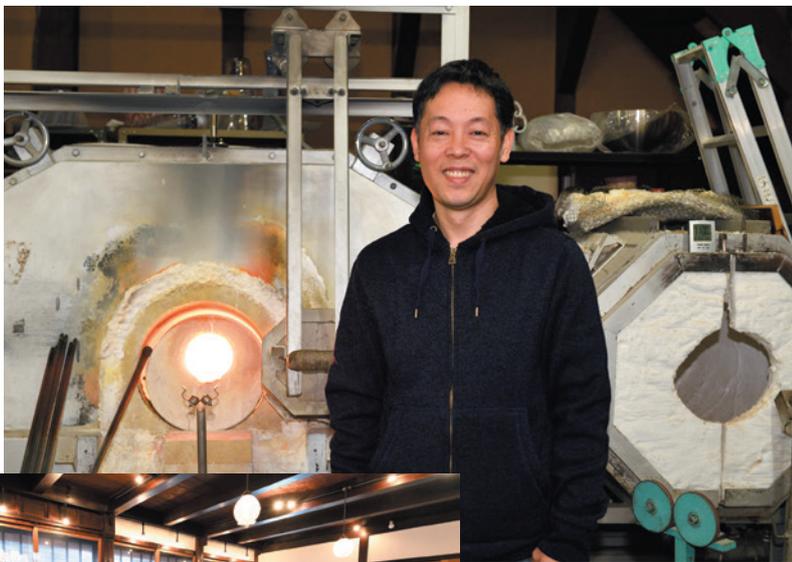
や建設には、補助金を支給。中心市街地の充実のためには、多目的広場や福祉関連施設などを含む、官民の機能を併せ持った総合施設などを積極的に展開するなか、郊外の戸建てから中心地のマンションへと移転する人が増えているそうだ。

「結果的に平均地価が上がリ、特に中心市街地は固定資産税収入が5%上昇しました。その分、市政に還元されますから、特定の地域に住む人への補助金支給や中心地の積極的な投資は、一見不公平に思えてもベネフィットは全市民に及ぶんです」

歴史あるまちが息を吹き返す

コンパクトなまちづくりを体感するべく、まずは串のひとつポータラムで海沿いの岩瀬を訪ねた。一帯の歴史は九二七年の「延喜式えんぎしき」にその名が見られるほど古く、かつては北前船の交易地として廻船問屋が集まり、にぎわっていたという。

時代が変わり、一時期は寂しい



1997年設立の「Taizo Glass Studio」代表取締役を務める、ガラス作家の安田泰三氏。後ろはアトリエで一日中燃え続けているガラスの溶解炉。10代で富山に移住した当初、水のおいしさに感動したと安田氏は話す。左／アトリエに隣接するギャラリーは、「北前廻船問屋森家」同様、岩瀬のメインストリートに面している。

状況だったが、ポータラムにより人の流れが変わったと話すのは、岩瀬にアトリエをかまえる「Taizo Glass Studio」代表取締役で、富山ガラス作家協会の共同代表を務める安田泰三氏だ。

コンパクトなまちづくりに先駆け、富山市ではあらたな地場産業として「ガラスのまちとやま」を掲げ、長年にわたり取り組

んできた。神戸出身の安田氏は、一九九一年に設立された全国初の公立ガラス学校「富山ガラス造作研究所」の第一期卒業生だ。

「開校当初から、公立では世界一の設備を誇る学校です。研究所を卒業した作家は美術展の賞を受賞するなど活躍しており、『ガラスのまちとやま』はかなり浸透しています」

工房にあるガラスの溶解炉は取



2015年開館の「富山市ガラス美術館」は、富山市立図書館本館などを含む複合施設「TOYAMA キラリ」内にあり、セントラムの沿線に位置する。建物の設計は隈研吾氏。



材中も炎が燃えさかっていたが、安田氏によれば二四時間、一年中火を絶やしてはいけないそうだ。

「設備の維持管理の点では、ガラスは焼き物よりも創作のハードルが高い。研究所を二七年も続けてこられたのは、地場産業づくりを目指した理念ゆえのことだったと思います」

二〇一五年には、「富山市ガラス美術館」が完成。その歩みは確実に実りを得て、市民にも成果が還元されている。

そう話す安田氏のアトリエは廻船問屋のかつての土蔵と住まいを

修復した歴史ある住居。ともに、築約一四〇年の建物だ。ほかにも近隣には、陶芸家、木彫作家とアーティストが住む。そのきっかけとなったのは、一八九三年から歴史を紡いできた地元の酒蔵、榊田酒造店代表取締役の榊田隆一郎氏からの声がかけた。

榊田氏の尽力により岩瀬の古い町並みは再生され、各作家のギャラリーに加えて県外からも人が訪れるフレンチレストラン、市内でも随一の品ぞろえを誇る酒販店などが古民家や土蔵を活用。観光客が散策を楽しむ地域へとよみが

岩瀬のまちづくりの要的存在、榊田隆一郎氏が蔵元を務める榊田酒造店。榊田氏の働きかけにより、歳月を経た建物がレストランやギャラリーなどに生まれ変わった。



えった。

「榊田さんに刺激を受けながら他の作家さんたちと一緒に展覧会を開くなど、多少なりともまちづくりに関わっています」という安田さんの作品は、まちの灯りをはじめとしてさりげなく景色を彩っていた。

受け継がれていく 伝統工芸品と住む人の心

続いてはJR高山本線を利用し、「おわら風の盆」で知られる八尾町へ。哀愁を帯びた調子と編み笠姿の踊り手が幻想的な世界を構築する祭りは元禄時代から受け継がれ、高橋治氏の小説『風の盆恋歌』により一躍、全国的に注目を浴びるようになった。

実は八尾は、室町時代から和紙の製造でも知られてきた。和紙が薬の包装紙や袋紙に使われていた江戸時代に隆盛を誇り、当時は数多くの製造元があったが、機械すきの洋紙の普及とともに斜陽化する。

そんな歴史をひもといてくれたのは、現在、唯一の八尾和紙製造



元となった「桂樹舎」代表取締役の吉田泰樹氏だ。創業者である父親の桂介氏は、和紙産業再興のために設けられた富山県製紙指導所で学んだ後、民芸運動の要、柳宗悦氏の「和紙の美」に感銘を受けて門をたたく。その縁で型染め作家の芹沢銈介氏と出会ったのが転機となった。

「戦後間もなくは型染めに必要な布が手に入らず、和紙に染めてみようとなったそうです。型染め

9月上旬に八尾で開催される「おわら風の盆」の歴史は、元禄の頃に端を発する。まちの子どもたちは、歩けるようになると見よう見まねで踊りを受け継いでいく。提供：富山市観光協会

下／桂樹舎の紙すき作業のひとつ。一日平均、約二二〇枚の和紙がつくられる。左／型染め和紙を使った桂樹舎の小物。鮮やかな色合いとスタイリッシュなデザインは、現代の若い世代の心をも惹きつける魅力がある。



八尾和紙の普及に努める桂樹舎代表取締役の吉田泰樹氏。「おわら風の盆」の存在は八尾の人々の深い地元愛につながるといふ吉田氏は、三味線を手に祭りに参加する。

は最後に水洗いする必要があるので、水につけても破れない和紙が開発されました」

その後、桂介氏は型染めの技法を会得して自らデザインを担い、札入れなど和紙を使った小物づくりも手がけるようになった。製品のラインナップは今もその当時のものが基本だが、時を経てなおモダンな趣をたたえており、東京の百貨店やセレクトショップでも人気の的に。二〇人ほどいる職人のなかには、「桂樹舎の柄が好きだから」との理由で県外から移住した二〇代の若手もいるそうだ。最近では、外部のデザイナーとのコラボレーションにも力を入れている。「和紙は現代の生活の中になくても全く影響がありません。ですから、少しでも身近に使えるものをつくってほしい」と思っているんです」

まちを美術館に見立てて毎年十月に行われる、「坂のまちアート」にも吉田氏は関わってきた。約一〇〇人の作家の作品が展示される会場は民家。住居を開放する協力が必要なこの美術展の開催が可能なのは、和紙同様に蚕かいこの卵を出

荷する蚕種業さんしゅで栄えた頃の古民家が数多く残っていることに加え、人の気質も礎いしになっていると吉田氏は話す。

「祭りのときに疲れた観光客が軒下に行ったら、その家の人が『中へ入って休んでいかれ』と招き、お茶やお酒を出してもてなす習慣が、八尾には昔からあるんです」

おわらのまちに生まれたあらたな観光拠点

そんな八尾のやさしい暮らしに魅せられ、新しい風を吹かせたのは、OZ Links 代表で「越中八尾ベース OYATSU」の女将を務める原井紗友里氏だ。明治五年築の蚕種、生糸商人の家屋を利用した「越中八尾ベース OYATSU」は、二〇一六年の四月にオープン。一棟貸しの宿泊施設に加え、観光客と地元の人々がふれあえるコミュニティースペースを目的としたカフェも運営されている。

富山駅近くで生まれ育った原井氏は高校卒業後、東京、中国で八年ほど過ごし、帰郷。離れていたからこそ気づいた富山の魅力を伝えたいと模索しながら県内各地をまわり、最終的にこの地を選んだ。「八尾の生活のなかには、祭りの時期ではなくても『おわら風の盆』がある。ここを訪れた人に、その暮らしにふれて欲しいと思ったんです。さらには周辺の棚田のように、日本の原風景とも言える美しい自然も決定打になりました」

祭りの時期は九月一〜三日の三日間と限られるが、三味線やおはやしや歌の稽古の音が、通年、まちなかでごく自然にもれ聞こえてくる。

「地元の人には日常的なその音

「越中八尾ベース OYATSU」の建物は、かつて「富山藩のお納戸」といわれるほど栄えた八尾の歴史を物語る。



まちの文化と祭りを守るため、「これからもよそ者の視点を常に持ち続け、ゲストと一緒に感動したいと思っています」と話す女将の原井紗友里氏。



に、私のようなよそ者は感動するんですよ」

カフェの掛け軸は、表具屋が毎月代えてくれる。玄関に花を飾る「花寄せ」の習わしのための花は、近隣から分けてもらう。そんな昔ながらのご近所づきあいに助けられ、まちの人とともに「越中八尾ベースOYATSU」を営んでいる感覚が原井氏にはあるという。

スタッフは、地元からの採用。カフェのスイーツは、界隈の菓子

店で購入。宿では夕食は出さずに飲食店を紹介と、原井氏もまた積極的にまちと関わりを持つ。

「八尾町平面ホテル構想と言っているのですが、まち全体にホテルを広げるイメージで、うちが客室担当なんです」

当初、祭りの時期以外の交流人口は限られていたが、現在では国内はもちろん、アジア、ヨーロッパなどのインバウンドの観光客も増加。二〇一八年には、宿泊施設を三棟に増やして事業を拡大する。

「事業が拡大することで、雇用が生まれる。にぎわいがでてきたら事業者が増え、定住人口の増加にもつながる。八尾の暮らしを紡いでいく住民を増やしたい」

そう語る原井氏は、暮らしを感じてもらうために、着物での町歩きや三味線体験、周辺の散策案内を含め、旅人の滞在時間を長くするための工夫にも努める。

限界集落を利用した自然に根付いた農業

最後に訪れたのは、市街地から車で三〇分ほどの土という山間の

地域。「土遊野」代表取締役、河上

めぐみ氏が農業を営むのは、かつての限界集落だ。化学肥料や農薬を使わない棚田で栽培する米と、平飼いで飼う鶏の卵や肉が経営の柱になっている。

三〇年ほど前、農薬を散布せず
に手で草を刈る「草刈十字軍」に携わった両親が関東から移住して「土遊野」を設立。河上氏はその流れを継いだ形だが、最初から農業に携わりうと思っていたわけではない。

「お米も卵も野菜も、うちではお金を出して買うものではなかったし、どうやってつくられているか知っていました。でも、大学時代に過ごした東京では違っていた。その経験は、農業やここでの暮らしをあらためて考える機会になりました」

東京から土に戻って七年。現在では牛乳の瓶詰めや配達から、ソフトクリームなどスイーツの販売も行っている。棚田の雑草を食べる合鴨に、東京の有名ホテルのシェフが魅了されるあらたな展

開も生まれた。

加えて注目したいのは、農業研修や見学者が増えていること。一般の家族連れから学生、農業関係者、まちづくり関係者まで、その数は年間で約五〇〇人におよぶ。

「農場で現場にふれたいという人は、以前よりもふえています。今までは、農家と食べる人の距離が遠かった。でも、これからの農業は、伝えるところまで仕事にする必要があると思うんです。うちは養鶏場だけではなく、ひなから育てた鶏を自分たちの手で絞めて肉にしています。おいしさや鮮度はもちろんですが、命のめぐりに触れられる場所でもあるんです」

二〇一六年の北陸新幹線開通もまた、その姿勢に影響をもたらした



約1000羽の平飼いの鶏は、この地で栽培された飼料米などを配合して発酵させた飼料を食べて健やかに育ち、鶏のふんは水田や畑の肥料になる。

日々、自らも農作業から配達までこなす「土遊野」代表取締役の河上めぐみ氏は、この里山で四季折々変わる富山の風土を体感して欲しいと話す。



「約二時間で行き来できる東京にあるものを、ここでつくらなくていい。何度か通っている間に、こんな仕事や暮らしもあると思ってくれたらいいなと考えています。うちが使い切れない土地に新しい人が来て、あらたな可能性を探しながら何か育ててくれたらおもしろいですね」

実際、スタッフのなかには、移住してここで働く人もいますが、過疎地という地理条件を自由に開拓できるメリットとしてとらえている視点に心惹かれた。今後は、本格的なファームステイ施設の建設も計画。未来にはこの土もまた、富山市の「団子」のひとつになり得るかもしれない。

やさしさを秘めた 富山のまちづくり

岩瀬、八尾、土と富山市内を巡ったが、この広域にわたる人々の生活に寄り添っているのが、本庁舎以外に七九カ所に設けられた地区センターだ。

「市民の九九%の人が、地区センターから二キロ圏内に住んでいます。ほかにも、市立公民館等が九一カ所、高齢者の総合相談窓口として地域包括支援センターが三二カ所にあります」と市長の森氏は話す。

そのほか生活保護世帯や児童養護施設の中学生への学習支援、障がい児とその保護者への支援など、福祉事業も多岐にわたる。「やっていることがたくさんあって、言い切れません」と森氏が冗談めかして笑うほどだ。

なかでも力を注いでいるのは、母親へのサポート。たとえば、シングルマザーの子供たちが母親の誕生日に花を贈れる「ありがとうと花束」。産後うつ対策のデイケアや宿泊に対応した「産後ケア応

援室」、仕事を抱えた母親の代わりに保育士が体調を崩した子どもを病院につれていく「お迎え型病児保育」など、ほかの自治体に先駆けた試みも多い。

「富山の人は、これが当たり前だと思っている。それでいいんですよ。逆にほかの都市の人は驚いて『行ってみたいな』と思う。結果として企業経営者の心に響き、『新しい事業展開をやるなら富山で』となりますよ」

森氏の狙いは、結果に現れている。富山市の人口自体は減少しているものの、下降線は緩やかになった。その理由が、近年増えた県外からの転入。特に女性の増加が目立つ。

「以前は単身赴任者が多かったのですが、今はご家族で転入している。これは非常にうれしい数字です。長年取り組んできた『選ばれるまち』という評価が定着したのだと思います」

市政に関する説明の多くが、細かなデータに基づいているのにも頭の下がる思いだった。花火をあげるだけではなく、きちんと後追いつき、数字で成果を示すからこそ

市民は納得する。

支援事業はもちろん、免許の自主返納を促す取り組みや花の活用など、住民の心を思いやる施策が随所に見られるのも印象深い。かつて富山の薬売りが子どもたちのために、紙風船を懐に忍ばせていたのをほうふつとさせる。

独自の取り組みは他にも多く、全国からの視察も絶えない。各地の家庭に薬が届けられたように、富山の「当たり前」はやがて、各地にも広まるのではないだろうか。



富山駅と岩瀬地区を結ぶ、日本初のLRT「富山ライトレール（愛称ポートルム）」。車体がモダンなデザインで目を引く一方、高齢者でも利用しやすい構造になっている。